



わらじ祭り

毎年、沢登りシーズンの初めに登山の安全を祈願してわらじ祭りを行っている。沢の滝を御神体に見立て、会員一同で神事を執り行う。筆者は永年わらじ祭りに際して神主を務め、祝詞を奏上し、山唄を奉納してきた。



平成 20 年二口溪谷・姉滝にて

月山と葉山

大鳥居―葉山―十文字山―月山―本道寺

昭和五年 四月九日―一二日

今出隆康(単独)

四月九日

今日は深野君の新築引越の日であつた。会員が十五名程集まり向うの身内の人々と一緒になり二十数名の大勢で八時半頃よりはじまり三台のトラックに満載し幸町団地より長町八本松まで移動した。八本松では荷卸しも順調に進み十一時半には完了した。これから皆で昼食と云う時に兵ちゃん宇ちゃんと共に早退の挨拶をして幸町に引返し自転車帰宅。昼めしをしていざ出発の準備と想っていたが渡波の兄夫婦が来ていて早速準備とは行かず何だかんだで出発は延びる。神崎君も二時前には来てくれたがようやく出発したのが三時となつてしまった。相変らず天気良けれど強風である。しかし俄雨となり関山峠までワイパーを廻す。ずい分雪のなくなつた関山峠を越えて神町に出る。しかし東根・楯岡と進むにつれて両側に積雪が増えてくる。最上川は濁流となり雨と融雪で大河となつて流れる。富並から大鳥居まで来る間に道路の両側は二・三メートルの雪の壁となつて豪雪の土地であるなど感心する。国道からは甕岳が良く見え又、やや霞んで葉山の全貌がみられる。大鳥居の山岳遭難連絡所と云う商店でワンカップとつまみ、チリ紙など買い登山カードを書く。前後のページは何と一月二十九日付の私と小崎・氏家パーティであつた。キスリングを背負つて出発した時は六時五十分前すぐ五メートル歩いて雪の径となり神崎君に別れを告げる。暮れかけた道を十分間程ツボ足で歩いたがザク雪が不安定なのでワッパを着けた。一月に一度偵察に来ていたので自信をもって入山する。しかし山は暮れはじめあの農



葉山の頂上稜線

機具小屋までに暮れぬうちにと、思つて急ぐのだが途中を間違えて右側の電柱添いに落ちてしまい気がつくとき見かけぬ地形となり地図を出してみたがもう暗くてライトなしでは見えぬ程。再びさっきのラッセルにもどり沢添いに進みどうやら見なれた地形となり嬉しや星の三つ四つ輝く空に小屋の屋根を発見、小屋の入口でザックからライトを出し時計をみたら七時である。小屋で食糧を出していたら出た！鼠が一匹。ワンカップと鱈で葉山の神様に供え早速夕食。鼠様の分お握りとバナナを供えてあとの全食料はキスリングにため天井から吊下げる。小屋にサレワテントを張り中で日記をかく。

今日から五日間は自由の時間。誰一人とも干渉を受けぬ単独行である。山に入つて思うことはすべてに対する感謝である。山に対する感謝、親に対する感謝、友に対する感謝、職業的に接する多くの人々に対する感謝である。我今ここのあることへの感謝。そして今回の葉山月山間大縦走は男子出生祈願成就の大感謝登山である。我が子富岳の出生大成就の御礼参り登山である。願をかけた山は泉ヶ岳（玄関から頂上、頂上から玄関まで徒歩）七巍峯（玄関から自転車、七峯巡り）船形山、栗子山、八甲田山等々の諸峯である。東の修験場月山こそ悲願成就の御礼参りに相応しく又、葉山の霊峰と組合わせ五十二キロメートルの旅立ちとなった。就寝九時半、外強風。

四月一〇日

素晴らしい朝を迎えた。起床は三時四十分。ペミカンにおにぎりを食べた。昨夜は鼠が賑やかであった。出発は五時四十分。農機具小屋よ、ありがとう。二間と三間程の藁のたぐさん詰った素朴な小屋であった。積雪三メートル。

七時一本立てる。途中まで古いワツパ跡など見えた。富並川の両岸は次第に嶮峻となり多くのデブリ地帯を乗越えねばならなかった。天気は快晴であるが巻雲などみられる。体は好調である。小鳥が啼り崖にはふきのとうが咲いていた。雪はしまっているもののやは



昭和 57 年 1 月 月山正月合宿

り五センチ十センチはぬかる。沢が二俣となった所で偵察する。急斜をピッケルカットしながらルートをつくる。これよりいよいよ登りとなる。スノーブリッジと云うより全面雪で覆われた沢を渡り急斜のヤセ尾根登りである。膨大な雪量の為ヤセ尾根上では中央から亀裂が入り雪庇雪崩は随所にみられる。若々しいブナの木に富岳一九七八とピッケルでサインする。

雪深き 葉山の樵に富岳と 刻みつつ想う 汝が産湯どき
かく程に優るる呼称世にあらじ 葉山より見るコニーデ月山

この前の大雨はこの付近では雪でありザラメ状の新雪のラッセルがけっこう酷い。雪塊の移動によりルート工作さかん。九時半尾根合致点一〇〇〇メートルにて一本。烏帽子岩がよくみえる、強風となり寒い。烏帽子岩の主稜線までは急斜となり一ステップ一ステップ慎重に登る。岩塔は敬遠してヤセ左にトラバースで乗切る。主稜に達した時十一時五十分前、主峯葉山がすぐそばに見え休憩もせずにガンバツたが意外に遠くてその間も登り降りのくりかえし。尾根も広くなったので心のどかに行けるが風はやたら強い。登頂寸前一羽の鷹が飛び立ち悠々と北天に消える。風化されているが立派な大鳥居があり神社は割りに新しくブロック壁に赤い屋根が葺いてある。カンヌキをはずし中の雪を除いて半身入らせてもらい祈祷、昼食させてもらう。御神体は大黒様（石造り）。風強く非常に寒い。山頂到着十一時四十分 出発十二時三十五分 山頂の鐘 イイ音。

十三時十五分（一本）ここは風も微かでのどかな春山のムードが溢れている。下りは思うように歩いて予定地点を通過の公算が大となる。

間近となった頃、峠手前に建物を発見、小屋まで降りてみるとこれは営林署の合宿所で

あった。どおりでこの辺伐採が進んでいる。平家の長屋風でプレハブ小屋と思ったがこれが二階建、平屋は完全に埋没し棟の部分が僅かに露れここにもそこにもと判る。主屋の戸締りは板の打付けであったが二階東側の窓がすぐ開いたので内部に入ってみる。畳敷きの二間であり寝具ストープ座布団テーブル何でもある。三時から四時までのんびりと過ごし天気図をとり梅酒を呑む。窓辺には雲か峯かと驚く程の大きさの月山が逆光に銀盤を照り返して聳えている。もつと歩きたかったが既に十五キロメートル、予定は完了したので明日を期待してこの小屋で充分休養をとることである。

反対側の窓からは雁戸、名号、熊野と蔵王連峯が望まれる。時々ゴーゴーと突風が来るが又ピタリと止まって夕日が暖かく差込む。葉山の頂上で神社のカンヌキを差込む際、屋根の突出部に頭をいきなりぶつけて左側に大きな瘤をつくってしまった。小屋備品の煎茶をやかんに一つ沸かしてそれをずい分飲んだものだからそれが効いて眠れなくなってしまった。高気圧の最只中で満天の星である。夜十時のニュースを聞いている。

四月一日（火）

三時四十分起床。出発は五時三十五分、雪が締って気分よい。三合山頂上まで四十分で登り切る。月山は大きすぎて絵にならぬ、鳥海山が素晴らしいコニーデ型を見せてくれる。三合山は素晴らしい展望台、雪のドームが頂上で三六〇度何もさえないものはない。蔵王連峯、二つ森番城、吾妻、朝日連峯、その先に飯豊本山も姿を現す。葉山の西面は特長に欠けた山姿でこれと云って売物はない。この天気も今日で終るかと思うと残念である。体調、雪のコンディション、天候すべてに恵まれて今日も思う存分駆けめぐることができそうである。六時四十分まで頂上滞在手や足が冷えて寒い。これより縦走ルートに下るがここ三キロメートルはヤセ尾根の難関である。七時十五分隣のピークに立つ吊尾根は雪庇崩壊で難渋した。一ヶ所クレバスに陥没した。ここの降りも物凄く感じである。

芽吹く樵丈余の雪に埋もりつ 鱗光を残して月の山暮るる

二番目の山一〇六五メートル峰は西面が岩場となって切れ落ちていた。小松の根などをホールドにどうやら二十メートル程の岸壁をよじ降った。八時十五分一〇三一メートル峰につく。前の尾根が酷かったのに比べ今の尾根は広く雪堤が続く夏の山唄をうたいつのだかに歩む。葉山の地図もあと何分かで通過しそうである。葦草森山の南面に広大な凹陥地がある。ピークを敬遠してその凹地を縦断する。雪一面の広野であり百五十メートルの葦草の斜面と好対照をなして絶景である。雪量の膨大なるによりまるで高山と云うか極地と云った感じさえする。ほとんど樹木もなく緩やかな平坦な雪面はまことに平和である。ここを通過して沢を越え九六四メートル峯に登る。ここで葉山海味の地図とお別れである。これよりしばらくは低山帯が続く。今九時二十分。夏柑がおいしい。このピークで里のスピーカー聞える。十時十文字山通過。九三五メートルの小ドーム山を乗越したところで昼食。いよいよ低山帯が終りこれより一〇〇〇メートル以上の山脈に入る。天には巻雪が全天に拡がり蔵王なども霞んで来た。これより五・五キロメートルで幕営に至る。一時頃到着しすぐ幕営を行い、本日中に月山を登っておきたい気がする。明日の天気は余り望めそうもなく月山頂上の巨大なアスピーテはガスられたらもう終りであるので空身往復四時間位でアタックを試みるつもりである。只今十一時五分。雪は腐ってラッセル酷くなりつつある。太陽には大きな暈がかぶった。

あと二時間で地蔵森山まで行くかと頑張ったが軟雪のラッセルでペース上らず更に一二一九の幕営予定地点まで時間がかかりここぞと思う所でザックをデポすれば既に二時五分前往復十五キロメートルその間八ツ程のピークを登降し容易に高度を上げずその先は高距五〇〇メートルの大登攀となるのだから並大抵のことでは捗らぬ。軟雪はますます



念仏ヶ原から月山を望む 平成 21 年 5 月

軟く幕営地点の何メートルか手前で不思議なことにワカンの留紐が続けて二回それぞれ解けて前進を引留める風なのである。早く着きすぎたので一二五〇峰まで偵察をして来た。それから雪洞鋸を使つて幕営面積を掘り下げそこから出たブロックを周囲に組立て風除けとし雨対策の透明ビニール及それを抑えるポンチョを屋根とし完璧を計る。

それから四時の天気図をかく。四国近畿は雨となっている。こちらも多少悪くなりそうだが軽度で済めばと願っている。

四月一二日 天気くもり

五時十分。順調なスタート。気温は高く雪の締りは期待に反した。小雨の中の出発を予想していたのに幸運にも月山の頂上が見えている。キスリングを小さく緊縛しサブ代りに下はオーバーボンのいでたち。初峯一二五〇メートル峰は二十分の所要、出発一時間後に一二七八峯到着一本。ぼんやりしてはいるが朝日連峯も見え遙か東方に葉山が雲を腹に棚引かせて望まれる。

七時、小刻みな数峯の登降の後、最後のコル、一三〇〇メートル地点。これよりは一九八〇メートルの頂上まで高距七〇〇メートルのダイレクト登りに入る。地図を見ながら無風のコンディションで本雉。水平距離三キロメートル余、途中まで巨岩や這松地帯も島状にあったがそれを過ぎれば見えるものは白一色地平線のような雪と空の一線のみ。歩いていても頂上は見えずピッケルを刺しては帰途の目じるしに残す。偉大な極地は果てしない。

月山頂上には八時四十四分に到着。

東の風が強く小雪が舞い飛ぶ。頂上に立った時姥ヶ岳方面はガスがかぶっていた。赤布に大願成就云々と書き僅かに出ている切妻の所に結びつけた。山は雄大である。頂上で時間を過ごしている間に姥ヶ岳湯殿山が晴れてきた。フェルトペンでは仲々絵にはならない

ものだ。心配された天候もどうやら持直した感じであるがこの月山大頂上はガスられたら下山困難になるところであるから早々に辞さねばならない。ツェルトもなし神社も厚い雪の下で身をかくすところもなし強風で体冷える。今カッパを着ている。

登っても登っても頂上が見えない山であった。まるで白一色わずかにシユカブラの大型のものが目印となるのでその氷の穴に赤布をからませて何ヶ所が残して来た。この名山しかし人の子一人登った跡もないのが何とも不思議に思える。

月山の大権現様今日の登頂有難うございました。九時十五分下山。

十時十分天地の境に着く。登りはここが七時であった。頂上からは一気に駆け下った。これが良かった。半分まで降ったら雲の壁が北上して来た。壁と衝突したらもう視界十五メートルのガス帯であった。ガスに入ってから比較的雪であったのでラッセルがはつきり残ってラッセルを頼りに足まかせであった。一本立てて休んでいる間に気温はどんどん昇ってそれがなおさらガスを誘発しているようである。夏柑、水、黒奴、ピーナツなどを食す。二十分休み、帰途、目をつけていた猿のこしかけを三ヶ採取。キャンプに着いたのは予想より遅れちようど正午となった。ワツパをはずしオーバーシュのままだテントに入り昼食とする。ラーメンとペミカン混せて五目ラーメンをつくる。テント内を整理し外に出し二重のフライをはずす。全装備をバックして背負い十三時二十五分下山開始、隣の地藏森山、一二五〇メートル峯もガスがかかり一目と思う月山ももはや遠い存在になっていた。

雪堤一路南下するが途中尾根はずしが一ヶ所、雪庇にさえぎられて苦労する。一時間程で一〇〇〇メートルラインを通過し下山の三分の一を終る。

下る程に雪は軟弱となり靴の中にも水分が飽和状態となり時には膝位のラッセルにもなる。又ヤセ尾根では雪庇崩壊の為に西側敷地帯に避難などする。地図上の姥像地点頃より下界が見降ろされ寒河江川の蛇行した川面や国道、民家など遙が下に見える。雪の軟化に

悩まされながら急斜面では雪崩に乗って降る。地元民のワツパ跡をみつけてたどれば本道寺に近い湯殿山神社へと導かれる。立派な神社で老杉に囲まれ本殿、楼門、社務所など堂々たる聖域であった。到着四時。しかし全屋雪囲いがしてあり多量の積雪にとじ込められて社務所（比較的新築でモダンな雰囲気である）を雪面と庇の間からのぞいても人気なく鎮まりかえっている。雪と杉ツ葉でかくされた石段の下をみると手洗石に清水が溢れていてのどがカラカラの小生は大喜び。そのうまかったこと。ワツパオーバーシューズボンと解体し一息ついてから神社前バス停で時間を調べると一日三本間沢まで行っている。午前一本、一五時五分、一九時五分とある。すっかりバスを断念しヒッチハイクを試みるが三台位だめそれも諦めて間沢まで二時間歩く決心をしてスタート。一キロメートル位歩いたら本道寺行バスが通過。又一キロメートル位歩いたらそのバスがやって来たので手を挙げて止めてもらった。どうやらこれで今日の帰仙が叶いそう。あのバスダイヤは何ぞ。西川町間沢でバスは終点。とうとうお客は私一人であった。ここで四十分待ち合せ十七時三十分特急山形行が出る筈である。そこで駅前の七エ門食堂でラーメンをたべストーブで靴下や敷皮を乾かす。又、我家に今夜帰れる旨電話する。バスは夕闇の中を突っ走り約一時間余でネオン輝く山形市内十日町角に着き下車、山形駅まで地下道二ヶ所をくぐり急ぐ。ここで又四十分程の待ち合せ。

十九時二十五分、急行朝日二号に乗車列車の暖房に靴下類を再び乾しビールと食糧で退屈をしのぐ。バスは二十一時ちょうどにすべり込み。一つ空いてた席にも座れ二十一時四十分懐かしい吾家に到着、南光台は小雨に濡れていた。

本道寺↓間沢 二七〇円 間沢↓山形 五五〇円 山形↓仙台（急行）九二〇円
仙台↓南光台 一三〇円 ラーメン 二五〇円

涯しなき雪のきざはし月の山 天地にひとり召さるわななき

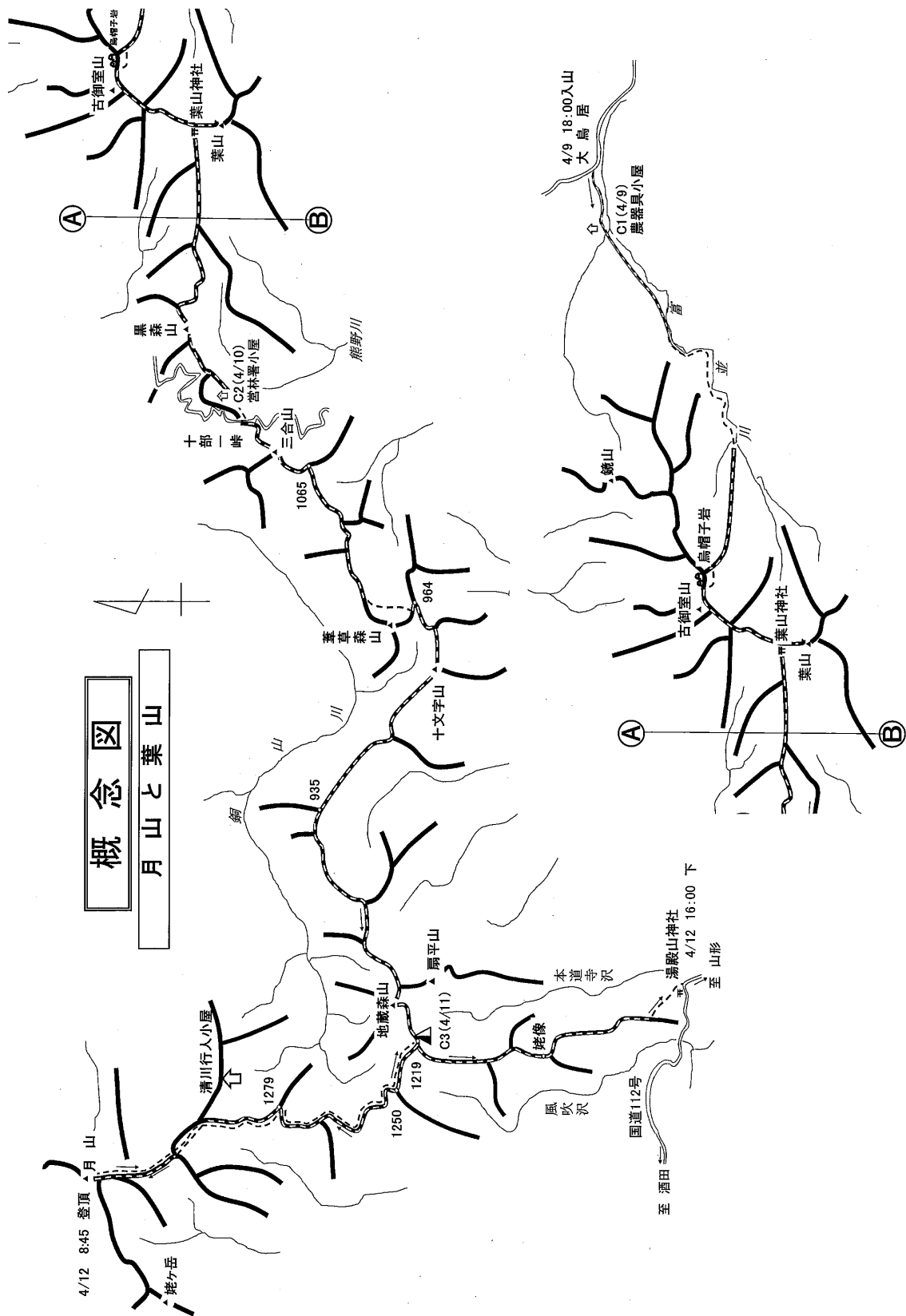


平成 12 年 5 月 月山山頂にて 右から 2 人目が筆者

かく程に優る呼称世にあらじ 葉山に拝す巨峯月山

葉山なる初峯に立てば月球の 視野に満ちたり畏れ伏すわれ

(未発表)



摩耶連峰積雪期単独縦走記

金峰山く母狩山く湯ノ沢岳く摩耶山

平成十三年 三月二五く二九日

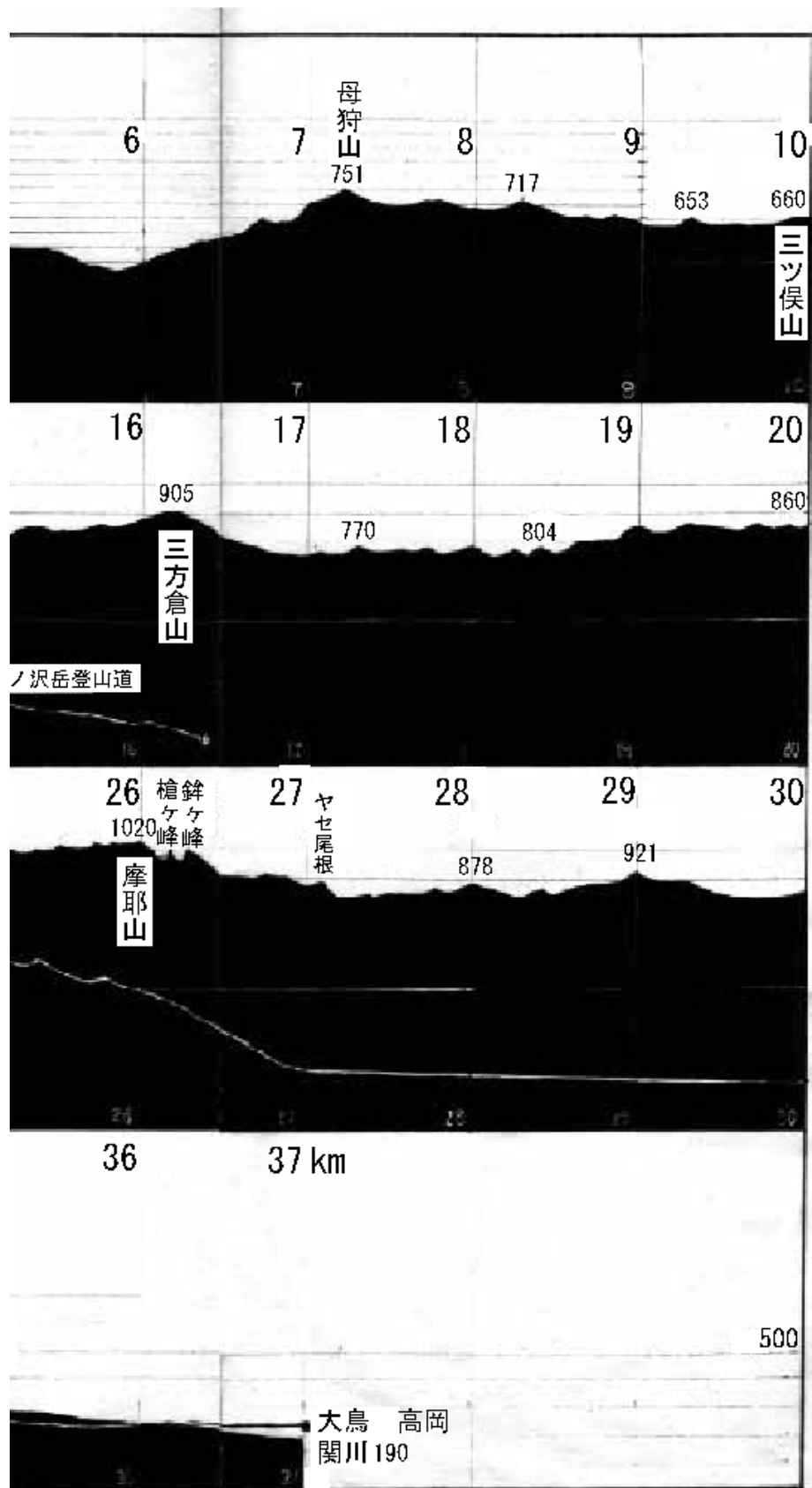
今出隆康

●鶴岡の街灯りを眼下に

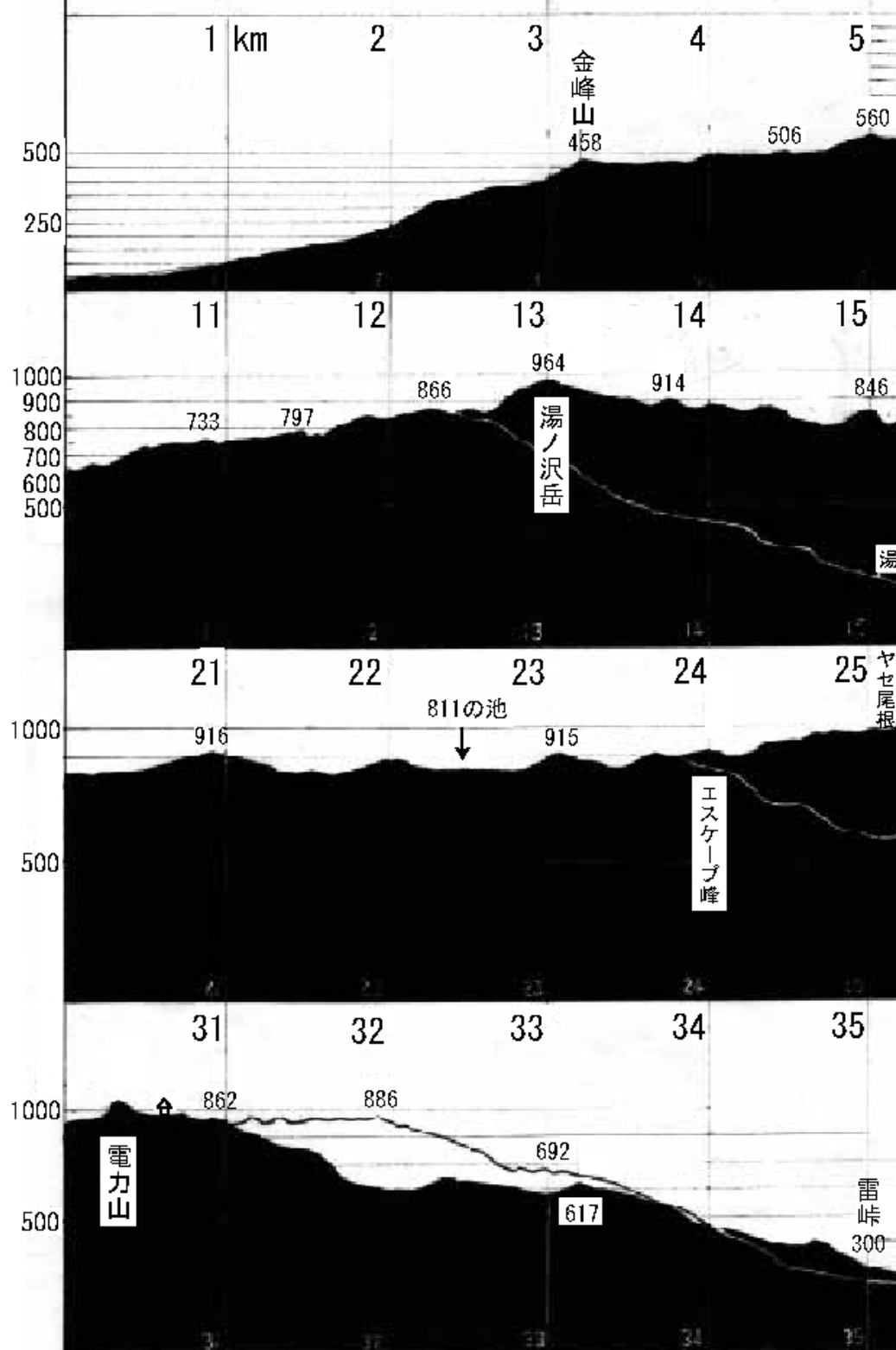
三月二五日

仙台の街はとても良い天気恵まれていた。安田君が白いスバルの四駆車で迎えに来てくれた。家に上り饅頭と緑茶で暫時打合せをした。昼前出発。のどかな日曜日で、北環状線は多くの車で混んでいた。関山峠を経由して一二号線に入り鶴岡へと目指す。一四時一〇分鶴岡駅到着。駅前にて小一時間、安田君の友人「熊さん」と落ち合う為に遊んでいた。鶴岡駅は小さい駅ではあるが何か小ざっぱりとした明るい佇まいの場所である。一五時頃酒田の学校教師の熊先生がラルゴに乗ってやって来た。

メンバー揃ったところで二台の車は先生を道案内に鶴岡の街区を南下して行く。鶴岡公園があり、壮大な神社や古木の森が見えた。街並離れて田園となり、程なく金峰山の道路標識など現れて入口に進入する。狭い道ながら除雪されていて両側に雪の堆積が見られる。この付近海拔二〇メートルしかない筈だ。杉木立の中をカーブしながら除雪路は続き、どんどん高度を上げて行く。アスファルト道が大神宮の駐車場で終り、広いスペースに車が数台駐車している。入口青龍寺標高二〇メートルから車でサポートを受け二三〇メートル付近の金峰山本宮まで鬱蒼たる杉並木に囲まれて靈気横溢の境内である。服装の装備を改め菊水を一本ずつ贈り記念の写真を撮る。ここでサポート隊の二人と別れていよいよ計画



摩耶連峰高度行程図（高度1.7倍）

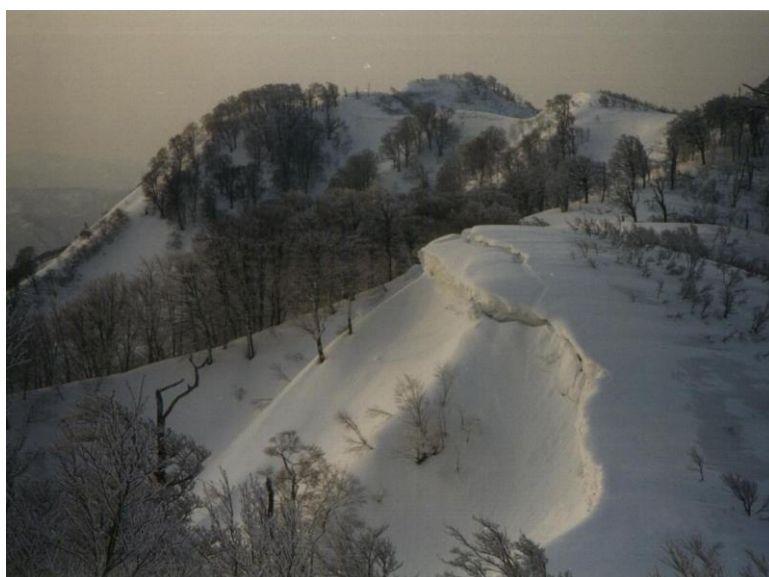


が実現すると思うと喜びがワクワクと押し寄せてくるのを感じる。

陽は傾いたがここより一キロメートルで金峰山頂上なので明るいうちに着ける見通しもついた。社務所・別宮などもあり小滝が掛かり竹杓子もあるので口中を淨め一杯の水を頂く。人にも逢わずシーンと静寂境の石畳を上の方に進んで行くと、突然大太鼓がドンドンと鳴って大神宮の前に出た。石段を登ってぬかずくと暗い社殿の奥に神主と数人の男女が座っていて祝詞の声が単調なリズムで流れて来た。駐車場の車の主たちがご祈祷を授かっている最中なのであった。山行祈願参拝の後、いきなり数十センチの雪径となった。ゴム長靴のラッセルがあり切開きの明るい雪坂をそれに従って行ったが、ぬかり酷くてワカンを履かざるを得ず一本立てて準備。ワカン着用で約一時間、一七〇〇、金峰山神社奥院に到着。積雪一メートル、龍堂が二棟、少し離れてトイレ棟、正面に奥宮が二階建ての優美な屋根曲線で美しい。さすが雪国、神社周囲は雪囲いで鎧われている。参拝者の立つ処だけ開放され透明タキロンで蔽われて、石灯籠が頭だけ出して雪面に佇んでいる。

泊まれる処がないかと三つの建物を点検するが、皆錠前がおりて入口も雪で半分塞がっている。今夜は雨の公算大なのでテントを初日から濡らしたくない。どうするか。巾は足りないが奥宮の雪囲い内にテントを張れないものか。テントを組立てて巾一・三メートルのテントを巾一メートルの隙間に潰しながら押込んでみる。しかしテントは横入口なのでタキロン側に入口が密着して困ったが何とかひしゃげて潜り込めた。という訳で犬走りの石畳の上に設営成功。雨対策これで万全、一安心したところで神社の周辺を偵察し、明日のルートを確認する必要がある。夏径は存在するのか、その露出度は何パーセントか、何らかのラッセルのようなものがあるのか。

神社の右手から大きく回り込む径らしき路肩状一線があり神社後方五〇メートルから南に向うと推察される。夏径は三〇パーセント位露出しているだろうか。そしてワカンの古い足跡が雪上に散見される。神社周辺は老杉に覆われているが離れると天然林となり榛



母狩山より湯ノ沢岳への稜線に行く

檜などの広葉樹林となって、低山の面目を保っている。

山頂は木立ちに囲まれてさして展望は優れぬが、樹間より鶴岡の市外が垣間見られ標高差四三〇メートルの都市景観が足下に迫る感がある。言わば鶴岡の展望台としての名所なのだろう。そして北東に月山の巨大な山体が出羽修験道の御神体として存在するのと西方には日本海の静かな海面が望みされるのであった。

四泊五日間の小さな個人山行の第一夜は無風で静寂境の金峰山神社から始まった。お神酒を供えて拝礼し独酌で一合の酒を押し頂く。水用雪は余り結構なものは得られなかったが林間だからやむを得ない。一汁一菜の夕食にありつく。軽量化の為五〇〇のボタン缶一個だけで四泊が賄えるかちよっと心配だったが極力節約して使えば何とかなろう。就寝前外を見ると眼下は鶴岡の街明りが輝き美しい。安田パーティは上田沢入山を多雪のため諦め温海側越沢コースに入ったと思われるが、もう幕営中であろうか。彼等が登頂に成功すれば何日か後にエスケープに使える可能性もあるが、一度経験した越沢コースも部分的には沢ルートや捲きなどもあり、冬期は非常に難ルートで恐ろしい筈である。どちら側も摩耶山は峻嶒な山相、楽で安全なルートなどありはしない。

●風雪の中での祝杯

三月二六日

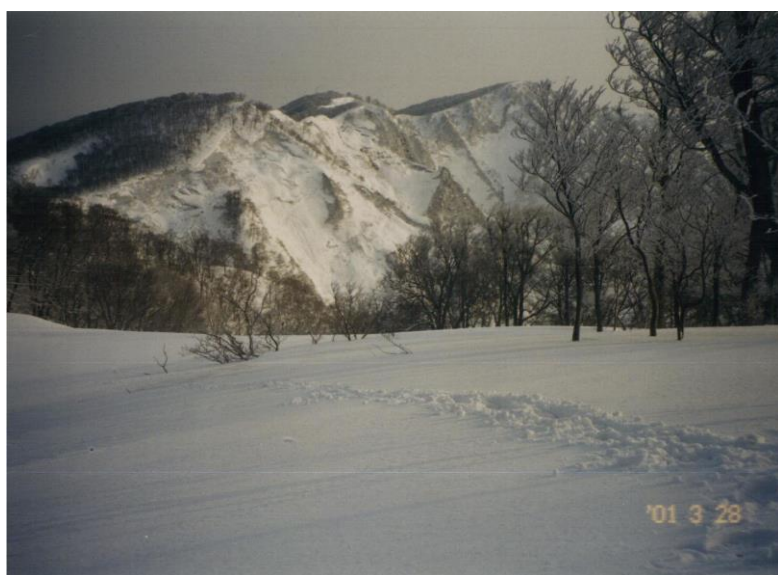
五時頃目覚め、すぐ朝食とし赤飯にラーメンを食べて装備をパッキング。七・一〇、金峰神社を出発する。小雨が降り続き、おまけに視界二〇〜三〇メートルの霧に巻かれている。昨夕の偵察に従って針路真南、地形図は多雪の山とて極めて等高線の緻密なヤセ尾根として表現されているが、樹林帯なので割に緊迫感もなく単々とワカンを進ませて行く。気温高いので雪やや軟かく、ラッセル状態なので仲々ペースは上らない。約二キロメートル南下、鎧ヶ峰（五六〇メートル）到着八・四〇。休憩中に霧が晴れてきて目指す母狩山

(ホカリサン・七五一メートル)の特徴のある山体が見えて来た。

下界も晴れて天気は好転しつつあるのだろうか。雪庇もザクザクに崩壊状態が続き低山の気温変化の凄まじさが思いやられる。雪面に黄色いかぼそい糸状の花が僅かに早春の気分を漂わせて散見されるが、イワカガミやシヨウジョウバカマはまだまだ四尺の雪の下である。ヤッケ上下とワツパ履く冬山装備の行動中で、とても春山気分にはなれそうもない。鎧ヶ峰と母狩山の中間の鞍部を九・四〇通過。ヤセ尾根の雪庇地帯である。一〇・〇五、母狩山前峰。一〇・二五、母狩山頂上。吹雪の中、頂上は雪堤あるのみ。母狩山は金谷から夏径があることになっているが最新地形図にも記載なく、山頂を示す標柱もないが雪堤の下に呑み込まれているのかも知れない。

少し行くとワツパ痕に遭遇。登山者がいたらしく思われ、時々ワツパ痕と巡り合った。ホウ！この連峰にも縦走を志す人がいたのか、思いは同じだ。その人は摩耶山を目指したのだろうか、所々残っているワツパ痕が摩耶山まで続くのだろうか、そうなると今冬の初登は成らずラッセルを貰ったばかりに第二登の屈辱を味わうのか。昨日今日のものではない、一週間前のものか、など考えながら歩いていると不意にサイレンの音が下界から登って来た。下の部落のお昼のサイレンだ。一一・三〇である。この付近は地形が痩せていて雪庇も殆ど落ち果てて尾根の藪との戦いとなってきた。天気くもり西の風、雪はザクザクに腐りワツパがとても役に立つ。

一二・〇〇、一本立てて昼食とする。草餅あんばんと茶で一五分間。一三・〇〇、樹齢二〇〜三〇年の若々しいブナが見事な尾根を通る。思わず行動を止めてザックをおろし、カメラを向けたくなった。少年期のブナ林の初々しさ、誠に羨ましいと思った。一三・四〇、偏東積雪の大雪壁が総崩れした壮絶な山体、三ツ俣山（六五〇メートル）を既に通過し、西側は尾根の下に台地状に拡がった地形で夏場は牧場にでもなりそうなのんびり地形が長く続いた。その単調さを破るように西方に尾根を派生した雪田のピークにて休憩。こ



湯ノ沢岳を振り返る

こから湯ノ沢岳九六四メートルへの急登があり、一五・〇〇登頂。泊地より一〇キロメートルを攻略した。

一二号線本郷から湯ノ沢岳へは夏径の記載があり、何らかの標識でもあろうかと期待していたが、南北に長い稜頂は灌木の一枝も雪上に現れてはいなかった。そして時折残るワッパ痕も頂上以南には一つも発見することはなかった。察するに湯ノ沢岳・母狩山稜線六キロメートル縦走した人または隊が一週間以内に行動したと思われる。鶴岡から至近の山なので案外安易にやれるのだろう。

湯ノ沢岳も東面は陰しく「ズリ」があちこちに見られ、黒い傷跡が痛々しい。今日も日が傾き、テント場を捜しながら動き廻る時間となった。三ツ四ツの瘤ピークを越えながら一・三キロメートル程南へ下り、風を避けられそうな地形を求めるが、このヤセ尾根の縦走ゆえ安全な所はどこにも見当たらず、やむなく西風と戦いながら必死の思いで設営を決行。テント設営トレーを使い防護壁のブロックを積む。益々風強まり雪も舞いはじまる。ブナの幹二本にアンカーを取り、樹と樹の間に雪ブロック壁を設けたが、天候大荒れとなりテントがバタつきエスパーステントが一晩中安全を守ってくれるか、この強風に耐えてくれるか、大丈夫、大丈夫と打ち消しても心配となる。

そうだ！今日は俺の誕生日、菊水で乾杯。バリバリと剥がされそうなゴアの幕一枚に生命を託して、ひっそりと六七歳の長い人生に乾杯である。シュラフに入ってから強風の唸りとテントのバタツキで一晩中眠れずに朝を迎えるが、西からの風と雪は鎮まることなく今日は沈殿も覚悟かと思った。

●夢幻の時の流れにしばし憩う

三月二七日

〆米でおじやを作った。テント内から偵察すると視界もややあるので出発したい気は多

けれどもこの強風の下、撤収は無理だ。失敗すればテント諸共谷底に吹飛ばされてしまう。単独行には慎重なくして安全はない。一日の停滞は覚悟して来たが、ここで使ってしまうか。残念だがまだ勝算はある。

ラジオを忘れてきたのは迂闊だった。気を紛らすニュースも音楽も気象情報もない。長い昼間を諦めて寝て暮らす。果たして安田君。パーティーは摩耶山への関川ルート赤布つけてくれたかな。この荒天で新雪が降りラッセルは失われてしまったに違いない。もとより関川ルートで下山の予定はないのだが一日停滞の欠損を補うために場合によってはその赤布を頼る事も可能の選択肢に加えることも必要か。頂上の雪面にメッセージを約束していたが、それがどうか。昨日は軽い風雪状態だったのでチャンスはあったと思われる。

テント内は寒く水筒やトレイが凍結した。布一枚白魔修羅場のテントにて蛹となりて春待つころ。一四〇〇、少しは風弱まったかな、そんな程度雪も降っている。明日はエスケープ峰まで一〇キロメートルを前進、C4を建設して後空身で摩耶山を往復、そんな予想を試してみる。ここは海拔九〇〇メートル付近であるが非常に低温である。やる事無く地図と高度図ばかり見ている。

明日の晴天を祈り一五・二五夕食とする。チーズ、するめ、キンピラゴボウなど肴に酒を一合飲む。一合の酒で長い停滞の時の流れに静かに酔い、しばしの夢幻の憩いに満足するのであった。幕内は寒く酒の暖などたちまち消えてゆくのが惜しまれる。

●新雪のヤセ尾根を越え摩耶山へ

三月二八日

無風、晴。四時起床。粗末な朝食を済ませてテント撤収。ご来光に恵まれ欣喜雀躍二泊したテント場を離れる。五・四五の出発となった。南面に一〇〇メートル高度を下げてコ



摩耶山への雪庇尾根。新雪で困難を極める

ルから一〇〇メートルの登り返しで六・二五、八二六メートルの小ピーク、五〇メートルのギャップのV字のコルを降下して三方倉山を目指す。

二日間の荒天で新雪が一五〇センチ尾根上に積り、木々や灌木に真白な霧氷が花盛りで美しくも見事であった。雪庇を覆った新雪はすっかりクレバスを隠して深いラッセルと緊張をもたらし一步一步が慎重になる。摩耶山や月山の姿を眺めながら七・一五、三方倉山と称される三角点九〇五Pに乗上げる。ここで鶴岡・下名川の各図を終えて上田沢図に入り、以後七〇〇〇メートルの小峰に連なるヤセ尾根地帯がはじまる。約一キロメートルの歩行で七七〇メートル峰通過、尾根上のブッシュに苦勞する。

天気はすっきりせず薄日で心もとない。快復したばかりなのに午後から又怪しくなりそうな気配を感じる。勇気を鼓舞して単独ラッセルを頑張り、視界の効くうちに今日の目的を仕上げるべきである。九・三五、一峰に乗上げる。あれから一時間同じような小ピークの連続で、これがどこと特定できない。しかも膝に達するラッセルの他には藪による妨害も目立つ。時々休憩と撮影で一息つくが三方倉以後はシャッターチャンスは無くなってしまった。

一〇・三〇、小ピーク、ワッパ着雪に悩む。もうサングラスも邪魔になりだした。昼食タイムとする。一一・一五、九一六P。雪原が広く尾根の西下に池を俯瞰できた。雲量やや厚くなったと仰ぐ頬にひらりと一片雪が粘った。来たか、早かったなと思って摩耶山を見ると暗く曇ってあの輝きは莫々と消えつつあった。一二・三〇、急登のピーク九一五P。気温が高くワッパのラッセルは重労働である。しかし今日中に摩耶山頂に達したい気持ちには変らない。失った停滞の一日の為に摩耶山を得ておきたい。

降雪は強まり視野狭まり、高度が上る程西風が激しくなった。途中エスケープ尾根の頭を通過する。デポして軽装で行きたい所だが生命維持装置たるザックを身から離す訳にはいかぬ。この先二キロメートルの距離にある頂上までは嶮しいヤセ尾根で危険地帯。一歩



天候急変して風雪迫る摩耶本峰

一歩が大切なスタンスなのだ。一寸の油断が滑落の危険になると自戒しつつ、ジリジリと進んで行く。撮影どころではなくなったが風雪に隠れる寸前の本峰を一枚、写るか写らぬかの瀬戸際で撮った。

降雨激しく視界は遂になくなった。前方二〇メートルがせいぜいの視界の中、天を突くような本峰付近の雪底をキックステップで削りピッケルを深く差し込み、スローモーションで進む。もうこれ以上高い所はないと効かぬ視野の中で考えているとピッケルにカチツと手応えがあり、雪面をカットして行くと十センチ角位のアルミの角柱の頭部が出て来た。山頂標と確信したが尚も確認の為数十歩進んでみたが垂壁のような屹立した雪底は降下してゆくように頂上を示す構造物や赤布など発見できず、一五・〇〇登頂と判断した。

すぐ下山行動に移り、崩れてズリ落ちそうな今来たラッセルを踏み踏み、楽しみにしていた帰りラッセルを辿ってみると、程なく降雪でラッセルが消滅していたので再ラッセルとなり些かがっかりした。約二キロメートルの戻り、一時間半を費してエスケープ峰九一〇Pに到着。しかし広い樹林の尾根だったので三時間前通過時の赤布一対の門をそれて少し下りに入り、おかしいと戻って赤布は発見出来ぬまま適地にテント設営。新雪でラッセルが消え、赤布も湿雪にまみれて見えなくなっていたのだろう。雪を踏み堅め立ち木を利用して風上に雪ブロックを施した。

●雪橋の綱渡り

三月二十九日

前日三方倉山からの稜線で見続けたエスケープ尾根。倉沢林道とピーク間七〇メートル弱距離二・七キロメートル。これに乗切れば林道三・三キロメートルで上田沢バス停に行けると言うことで強いて早発せせず、朝はのんびりして八・一五出発とした。尾根下降点を求めて一〇分間位ラッセルした。又も新雪二〇センチ積もったが、天候に恵まれて今

日中の下山を確信していた。

ブナの急斜面を新雪雪崩を起しながら下って行く。胸のすくような新鮮な気分であるが、摩耶山の隣り尾根として横から眺めた偵察とは傾斜度が違う。このまま全層雪崩で一挙に落ちてしまいそうな恐怖感もあった。頼みは一本のピッケルだけ。余り急な所は後向き四つん這いでソロソロと下る。昼頃は林道へ出られるかとの甘い読みは外れて一一・〇五、中間地点のピークで一本立てて腹拵えをした。あんなに良かった天気もここで急に雪降りと変った。

難所は連続し尾根がスパツと切れた所へ出た。ここの雪層はズタズタに裂けて遥るか下に尾根が続く。クレバスは三メートル位の深さで彼我の隔り三、四メートル何とか飛び越せれば正解なのだがそれは無理。一旦底へ飛び降りるのも地面着地の際の怪我とかワカン破損など危険視される。暫し考慮の後、来た方向に戻るように三〇メートル捲き何とかクレバスの底へ下り電光形に重複する底を縫って下手の雪層を攀じ登る。湿雪は激しくなりフリースの手袋は一〇分おきぐらいに絞り絞りを繰り返す。表層雪崩帯、クレバス帯を通過したら今度は林相が変わり、磨き削られたヤセ尾根帯でネズコ針葉樹が生えている。黒樹が生えているからヤセ尾根でも何とかなるさと見ていたのだが、どっこい冷酷な現実が目前に迫ってきた。樹はあつても手がかりにもならずキレットの連続が黒森に隠されていた。狭い雪庇を綱渡りしてキレットへの降下、そしてキレットに架かる不思議な雪の階橋、そこに刻まれた羚羊の足跡、この橋をアオが通るのだ。巾は三〇センチもない。ワッパの巾も足りない程の巾だ。その度ザツクをデポリこの難所を試渡し多少工作を加えて偵察した。側方から観察すると基岩部から既に一尺巾と言った感じで雪のブロックを何十箇も丁寧に積み重ねたように思えてならない。「アオの雪橋」と称したい所だがまさか羚羊が橋を架ける筈もない。しかしこんな峻厳な尾根は人間の立ち入りを拒み登山路も開かれずアオの聖域となっている事は事実で、何ヶ所かアオの泊場休み場が存在した。複数のアオが



荒々しい摩耶山系の東面断崖

この尾根を根城に冬中生活している事を考えると、アオの雪橋は半年の冬中毎日移動して少しずつ踏み固め橋脚が形成されて最大積雪期にあの架橋に至るのではと思えてくる。

アオの橋は十ヶ所位あったろうか、キレットとキレットの間にそそり立つ突起の乗越しもあり空身でルート工作をしながら、よろめいたら両側百、二百は沢へ墜落必至で些か緊張の連続だった。湿雪には悩まされたが幸いに味方は無風だった事、ザックも最終日で軽くなっていた事、身の毛も弥立つアオの雪橋さえ今となつては味方だったのかと思えてくる。

一三・四五、前後のピーク、旺んに尾根別れするのでルートをとるのに苦勞する。しかも視界がなくなつてルートの特定が難しくなり、雑木の木立ちが邪魔をする。これぞと思つて辿つた尾根は次第に北へ回り込んだらしい。平地へおりて倉沢川に出たがもう夕方かと思う程真暗となり、湿雪は霏々と降り気分も暗たんとなる。橋を捜すが見当らない。ザックをデポして周囲一〇〇メートルを偵察する。予定地点に下りたと確信しているからこの辺に橋がある筈だと思ひ込んでゐる。沢を遡つてみる。上流に滝が見えて杉林の中は改めての深いラッセルであつた。戻つてザックデポ地点。降下地点が間違つていないかと反省して再検討。沢を下流に下ると途中は谷地となつており開水面が見られ、少し気味の悪い所を惧る惧る渡つて廻り込んで行くと橋に出た。予備日を使つてもう一泊も覚悟していたのでこれは嬉しかった。何せ何もかも湿雪で濡れていて些か泊るにも抵抗があつたからだ。橋に這い上つたら又オーと声が出た。雪上車のキヤタピラーが圧雪して続いていたからだ。

踊る気持で早速キヤタピラーの跡を辿つた。最初はワッパで、次いでワッパを脱ぎツボ足となった。これは快適、嬉しくなつて進むうちハッと驚いた。下っているつもりなのに堰堤の滝がこつちを向いてかかつていた、しまった、平坦路に狂つて上流に歩いていたので。すぐ橋まで引返しがついていた。橋から二キロメートル先、森の腰部落までキヤタピ

ラーの跡は続く。途中作業小屋など何棟かあったが雪に埋れて休み場にもなりはしない。一六・三五、森の腰の家々に灯が点く頃、やつとアスファルト道路となった。途中軽トラックのおばさまが声をかけてくれ、バス停まで同乗させてもらった。バス停は魚屋さんで色んな日用雑貨を売っていた。自宅と連絡本部に無事下山を報告する。おばさまが事情を話してくれバス時間まで待つことになったが、折よく商品配達で来た鶴岡のマルトモ商事さんが山形自動車の急行バス停まで送ってくれることになって、商用車キャバンの助手席に乗せてもらった。

真暗となった道路をライトを照らし水しぶきを上げ湿雪をワイパーで払いつつ駆け上って時計を見たら残念、一七・一〇仙台直通は通過したばかり。一時間後に山形駅前行がある。その間残っていた食糧草餅クッキーなどで軽食をとり、靴下手袋を絞ったりワッパの氷を剥がしたりした。暖房の効いたバスが来て約一時間幸せな気分シートに寛ぐ。山形駅でも待ち合わせ三〇分程あり熱い駅そばや電車内ではワンカップで慰められ、のんびり一人旅を満喫した。降り立った北仙台駅は春の大雪で大変だった。それでもタクシーは雪を馳立てて自宅に運んでくれた。最終日の長い長い一日は終り、摩耶山縦走の幕は降った。

●後日談

九月一日

出羽三山秋の峰山伏修験が終って、二日摩耶山に倉沢コースで登頂の予定であったが、月山神が摩耶山を拒み右足に故障を来たし、志し能わずに帰宅した。



摩耶山への縦走路 中央白いピークが摩耶本峰

九月二五日

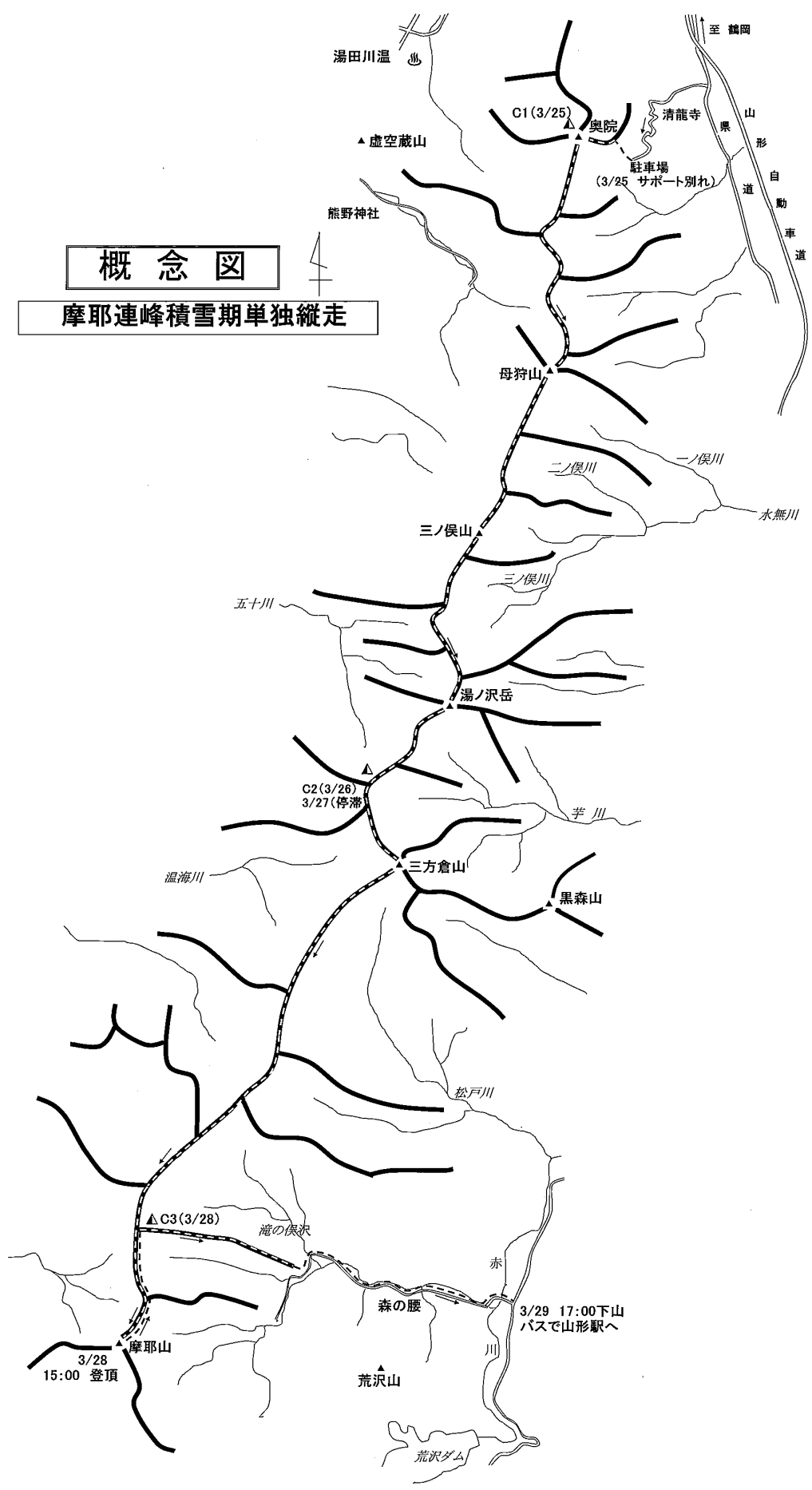
改めて摩耶山に登り頂上調査を行い、その結果山頂標がアルミ製の一〇センチ角の標柱で高さ一・六メートルあり、傍らに一等三角点、小さな神社があった。

上田沢の魚屋さんと鶴岡のマルトモ商事さんに礼状を送ったところ、魚屋さんのお婆様から電話で話を聞きたいとのことで長時間山の話をした。摩耶山を下って来た事が不思議だったらしい。天狗様か仙人様と勘違いしたのかも。

摩耶の山 神助に頼り 尾根渡る

深山幽谷 アオの雪橋

(やまびと季報二三号下巻掲載)



概念図

摩耶連峰積雪期単独縦走

